

北陸大学 紀要
第11号 (1987)
pp. 155~164

トラーの亡命—人間の文化のための反ナチス闘争—

林 敬*

Ernst Tollers Exil. Ein Kampf gegen den Nationalsozialismus
für die menschliche Kultur.

Kei Hayashi

Received October 20, 1987

はじめに

「亡命者達は脅迫された文化を防衛するために、どのように自分達の分担を担うことができるか。」⁽¹⁾—1939年5月22日、遠くスペインでフランコ軍が首都マドリードの戦勝パレードに湧いた日の3日後、エルンスト・トラーはニューヨークのホテルの一室で、自らの命を断った。冒頭の問いは、未解決のまま彼の「最後の遺言」となってしまった問いかけ、あるいはそれ以上に、危機に瀕した人間から共に苦しんでいる人間へのアピールであった。第1次世界大戦、革命、1920年代の社会の混乱を経験し、人間を苦しみから解放する社会、人間らしい在り方とそれに関連しあう文化を求め続けてきたトラーは、まさにそのこと故に故国を追われて、苦難に耐えつつ、自分達の迫害者と闘った。それは個々の亡命者の個を原点とした人間らしさの抵抗であった。しかし、全体主義国家は個にとって、あるいは個の連帯にとっても余りにも強大であった。多くの仲間達は権力者の手に落ちて、また自ら死を選んで不帰の客となった。それ故に問いかけは、個の絶望を前にした緊張に満ちたものであった。

トラーの亡命については、革命時代と比べると比較的研究者の記述が少ない。多分それはこの時期にトラーの重要な作品が少ないのと、思想的にも、行動性はますます決然としてきたものの、新たな発展が見られたわけではないという理由によるのだろう。しかし、亡命時代の行動的作家トラーには、思想と現実の緊張関係の中で思想を担う人間の問題性が極限的に現われている。本論はトラーの1918-19年の革命時代の非暴力闘争⁽²⁾や共和国時代の思想を視野に入れながら、主として1930年代の批評的著作によって亡命後の彼の行動の原点となった思想と、現実での苦悩の理解を目指している。

1. 亡命体験概観

*教養部

Faculty of General Education

1933年1月30日のヒトラーの政権獲得の時には、一般に事態はまだそれ程深刻に受け取られていなかったが、2月27日夜の国会議事堂炎上事件と共に、多くの逮捕者がでるに及んで、反ナチスの知識人にとってドイツを脱出することが現実の問題となった。ナチスから見て、トラーがどのように評価されたかは、彼が第1回目の焚書（1933.5.10）と、同じく第1回目の市民権剥奪（1933.8.23）の対象者としてリストアップされたことだけからでも容易に窺い知れる。トラーは当日たまたまチューリヒに滞在していたため逮捕を免れたが、この日から、彼の亡命生活が始まった。

多くの脱出者達は「逮捕の波」はすぐに過ぎ去るものと考え、ドイツの周辺諸国にとどまった。ロンドン、パリ、ヴィーン、プラハや、南フランスの海岸が主な集結地であった。しかし、ナチスの文化政策は、幾つかの法律や監督官庁の設置により徹底して推し進められ、その結果非ナチス知識人はドイツに存在することが許されず、早期帰国はかなわなくなった。それどころか、オーストリア、チェコ併合、さらに第二次世界大戦の開始後にはヨーロッパにさえいられなくなった。ビザを所持しない亡命者は収容所に入れられ、さらに反ナチス知識人はドイツの収容所へ送還された。従って、彼等は不法にヨーロッパを脱出するしかなかった。⁽⁴⁾

このような状況の下で、トラーはまずユーゴのラグサで開かれたペンクラブ会議に参加、ドイツ代表団の反対を押し切って講演し、ドイツペンクラブのナチスに対する無抵抗を批判した。この講演によってペンクラブを政治的に方向づけると共に、トラーは国際的舞台に一定の立場を確立した。以後亡命者の救済活動に従事したり、1933年から36年秋までは主にヨーロッパで、その年の11月から1938年夏まではアメリカで、各地のペンクラブ会議や講演旅行で講演しながら、ナチスの実体を明らかにし、反ナチスの国際世論を呼び起こそうとした。また、1936年7月にスペイン内戦が始まったが、トラーは38年7月にスペインに入り、爆撃で苦しむ市民とそこに活発に展開している民主主義を目の当りにして、「人民戦線」支援、特にスペイン市民の飢餓救済を決意した。まず、マドリードから放送を通じてスペイン市民の飢餓救済を訴え、さらにその年はフランス、イギリス、スカンディナヴィア、合衆国でスペイン救済のために精力的に募金活動をした。以上の反ナチス闘争と救援活動がトラーの闘いの直接的活動であったが、その間作家として自伝的著作、>ドイツの青春<（1933）と>獄中からの手紙<（1935）をアムステルダムの亡命出版社から出版、また、ドラマの執筆、上演の仕事に従事するなど、講演活動と相互補完的に「もうひとつのドイツ」とその精神的姿勢を表現した。しかし、1937年のメキシコ旅行の頃から重い躁鬱病に苦しめられた。38年7月にはトラーの精神状態の不安定から結婚生活が不可能になり、離婚。また、クラウス・マンによると、ずっと不眠症に悩まされたあげく、⁽⁵⁾マドリード陥落（1939.3.28）後間もない5月22日、ニューヨークのホテルの自室で自殺した。⁽⁶⁾

2. 反ナチス闘争

（共和国時代）

トラーの自殺の数週間前に行動をともしたK. マンはまだ死の興奮がさめやらぬうちにトラーについて次のように語っている。

『我々が当時「人類」あるいは「人間性」という言葉を聞いた時、ひとりでに我々の目に涙が湧いて来た。』エルンスト・トラーはよくこのように言っていた。彼は1918/19の偉

大な、激動の日々の思い出が好きだった。当時の仲間の多くは、死ぬか、疲れ切るか、美しい信念を裏切った。しかし、エルンスト・トラーは忠実にとどまった。ヒューマンなものに対する革命的情熱は、彼の作品とすべての活動の中で最後まで活発に生き続けた。⁽⁷⁾

トラーはもともとユダヤ人という限られた存在から、より大きなドイツへ、そして戦場の体験と反戦運動を経て人間へと、その思いを発展させていった。その思いを実現するために社会主義に傾斜したが、人間的なものを暴力的に犠牲にする政治の過剰に対しては懐疑的であり、政治的なものはあくまで手段であった。Th. マンはかつて共和主義に転向した時、「思想 (Gedanken) は変えたが、心 (Sinn) を変えたわけではない。」⁽⁸⁾と、寧ろ積極的に弁明したが、その意味でトラーの場合も思念が思想の根底をなすのであり、彼の社会主義的傾向にもかかわらず、彼の出発点の人間観はドイツの人文主義文化の伝統に連なるものであった。

革命の敗北後、様々な不信や混乱を経験したワイマール共和国時代においても、トラーの活動の根底の人間的なものへの思いは変らなかつた。この思いが彼の視点を規定し、復古主義的なドイツへの回帰と党派的な政治優先の非人間性に批判的な距離をとらせた。しかし、それは政治に、あるいは社会の現実に背を向けたということではない。寧ろそのこと故に、共和国の現実の問題性をリアルに認識し、共和国の方向を見定めようとした。一方で、党派性の回避、⁽⁹⁾断念は彼にとって必要な思考と行為の独立性への願望を意味した。

S. ラムはトラーの20年代の批評的、理論的著作とドラマの関係に注目して、それらが一つのテーマに繋がっていることを論証した。—「共和国の政治的現実との事態に即した、冷静な対決」、このことがその理想的憲法にもかかわらず、混乱と不安定な時代であった共和国時代のトラーの根本的テーマであった。この対決を通して、例えば、>バイエルン裁判のドキュメント< (1924) では、バイエルンの、さらには共和国の裁判の階級裁判的性格の暴露によって、1918年の王制の崩壊後も、社会と経済の権力構造は本質的に変わらなかつたという彼の信念が示された。>どっこい、俺達ゃ生きている (Hoppla, wir leben!) < (1927) では、共和国の文化的、政治的複合性が、見掛け上の多元主義であることが描写された。つまり、多元主義は共和国の原理になっていたが、それは理想的な意味でそうであったにすぎない。それは相対的に平等な権力配分など、社会的調和を前提とするが、現実にはそれは存在しなかつた。ヴィルヘルム時代の旧上層階級、軍が残存していて民主化傾向の阻害要因となっていたし、さらにリベラルな民主的伝統の不足は共和国の基礎の理想主義の破産の必然性を示していた。共和国が基礎構造において階級社会にとどまる限り、それは個人に自由な空間を保証するどころか、個々の人間の孤立と無力感を強め、固定化した。— S. ラムは>どっこい、俺達ゃ生きている!⁽¹⁰⁾<ではまさに以上のような問題がテーマ化されていると解釈している。獄中生活に続く共和国時代は、トラーの政治活動は最も少なかつた時期であるが、作家としては現実の具体的事象の根底にある問題性をリアルに観察したと言えるだろう。

ところで、トラーは社会の根底の激変、また、産業化の矛盾の中で、民衆が次第に復古的なイデオロギーに傾いていくのを早くから感じとっていた。それがナチズムという形で先鋭化し、勢いをましてきた時、トラーにとってナチスに対する警告、さらに反ナチス闘争への呼び掛けが当面の緊急課題になった。1929年2月のアイスナー追悼講演で、彼は、近い将来のファシズムの支配の可能性を指摘した。激動の中で、共和国は何も学ばなかつたが、反動はすべてを学び、今や、1918年当時の革命勢力が持たなかつた、自信、機構、権力への意志、知的力を手に

している、というのである。⁽¹¹⁾ 1930年には、ヒトラーの党は社会主義者、共産主義者、平和主義者、民主主義者に対してテロルを断行するのだらうという論理的にも確実な見通しを表明し、さらに、ヒトラーのイデオロギーは小市民のイデオロギーなので一貫性がないからこれを利用しながら変えていく、という考え方の危険性と、独裁体制が確立した後の抵抗の難しさを警告し、反ナチス闘争の必要を訴えている。この闘争の現実の担い手としては彼は「自由な労働組合の統一戦線」に期待した。⁽¹²⁾

トラーの闘争の基本戦略は大衆闘争であった。1918-19年のバイエルン革命の時も前衛党の指導によるのではなく、大衆の自発的なレーテへの結集、連帯を基本にした。レーテが政治的経済的自己管理と革命の闘争センターであった。⁽¹³⁾ しかし、この場合、大衆の成熟は重要な前提条件であり、確かに大衆の未成熟ということが革命の混乱、失敗の原因の一つに数えられた。それに対してトラーは、不断の日常活動を通してのみ、生活と行為の間に隔たりがない時にのみ成熟可能があって、知識のみでは成熟しないと考えた。このような大衆の自発性、結集、連帯を基本とする思想は、共和国時代においても変わっていない。ナチスのパレードが日常化し、国会は形骸化、破産、失業は広範な層に拡大し、大衆は飢え、扇動され、要するに30年代に入って共和国の危機を迎えて、トラーは労働者階級に対して、ファシズムの勝利を阻止する唯一の手段は、明確な具体的闘争目標をもつ全労働者階級の統一機構の創設であると訴えた。⁽¹⁴⁾ しかし、この闘争は決して暴力的手段によるものではなかった。トラーにとって革命闘争当時、人間が「大衆」化することにより、当初の目的を危険に陥れる無意味な暴力が発生する、という問題は深刻な問題であったが、これについては彼はすでに一つの結論を出していた。「バリケード闘争の時代は終わった」というのが彼の経験的認識であった。それよりも、彼は別な方向で、むしろ個々の衝突の局面を超えた、より本質的な次元での反ナチス闘争を構想していた。「700万人の組織化された労働者はものを言う」⁽¹⁵⁾ というのである。700万人の労働者の結集がそう簡単に実現するものではないが、王制を転覆した反戦平和の反乱の成功も、戦場や生活レベルでの苛酷な体験を経た大衆の要求がエネルギー源であった。トラーはナチスの暴力による自己実現の方法に対して、大衆の闘う意志の結集そのものを対置した。そのことによって暴力の克服を目指した。

一方、闘う意志の重要性の認識は彼を平和主義から区別した。亡命後のことであるが、彼は平和主義を次のように批判している。— 平和への要求は、かつて確かに革命の原動力となった。それは、平和への要求が戦闘的であったから、反乱であったから、そして青年達が反乱の意味を理解したから、革命的な要求になり得たのであった。しかし、当時青年達の人間的な憧れを結集した「平和」は、戦後社会でその意味が変質した。平和は国際的にも不平等な現実を固定するものとなった。反動勢力はこのような現実に対する不満あるいは希望喪失の状態を自己の勢力拡張のために利用した。それに対し平和主義は国民の窮状や、感情に対する明確な視点を持たず、自己のイメージをぶつけることもせず、敵対陣営に譲歩した。— トラーはこのように批判しながら、平和主義の課題として、民族主義的イデオロギーによって加熱した感情を沈静化し、英雄的な死でなく、英雄的な生を説くこと、そして平和主義者は殉教ではなく、粘り強く自己の使命を全うすることを訴えた。⁽¹⁶⁾

政治の基盤の拡大した現代では、大衆の意志は社会を動かす力として決定的な意味を持つ。この点の評価については民主主義者も全体主義者も変わらない。ただ、全体主義者は上からの

指令でそれを一つの方向にまとめる、民主主義者は下からそれを形成しようとする。もっとも、冷静な政治学者は、現実においてはこの違いはそんなにはっきりしたものではないと見る。¹⁰⁷この意味でトラーは決して現実的な政治家ではなかったが、彼にとって、大衆の意志への働きかけが戦闘的意味を持った。トラーの活動を振りかえってみると、彼の働きかけには3つの局面がある。1番目はドラマ作家として、2番目は政治への直接参加、3番目は講演活動を通してであった。これらは互いに独立しあっていたり時期的にはっきり分けられる、というものではないが、時代の状況の変化につれて大枠の傾向はあった。革命時代は文学のコードと政治のコードは一致していた。20年代ではドラマが主要な領域となった。そのドラマも革命の影響下で書かれたものが、イデーの直接的表現、言い換えると、登場人物達はイデーをそのまま体現していたのに対し、次第に登場人物達は複雑な、心理的に動機づけられた性格を持つようになり、彼等の葛藤を通じて複雑な政治状況が描かれた。しかし、1933年のナチスの権力掌握と、それに続く民主主義勢力の弾圧によって亡命に追いやられた後は、ドイツの民衆に直接働きかける基盤は失われた。亡命以後は国外各地での講演によって、国際世論に対してファシズムとの闘いへの支持を訴えることと、スペイン人民戦線への救援活動が彼の闘いのテーマとなった。しかし、文学的活動の面では、亡命時代に主要な作品を書いた多くの亡命作家達と違って、重要な作品を残さなかった。不安定な生活と、無数の心労を強いられたということの他に、社会と共に制作するトラーのような作家にとって、その社会から離れた存在であることや、>ハル神父<の場合に見られるように作品の上演も出版も困難な状況などは、とりわけ制作に影響を及ぼす大きな要因と考えられる。逆に言うと、この意味でトラーは彼の世界市民的志向にもかかわらず、まさにドイツの民衆に依拠する作家であった。

(亡命後)

トラー亡命は経歴の当然の帰結であったが、U. ケテルセンによれば、トラーの亡命はそれまでの文学構想と密接に関係していた。彼の言うところによると、トラーにとってはもともと書くことと政治的行為は一致していた。そこでは美的芸術が問題でなく、人間の解放のための社会的構想が問題であった。そして、それは「党文学」的ではなく、「支配関係のない自由な連合の下に、人間にふさわしい自由な結合を導き出す言葉」が問題であった。しかし、20年代後半に入って、言論よりも経済的・政治的利害上の事実的なものが優勢になるにつれて、彼の構想の基礎である個人の存在は幻想となった。従って、トラーにとっては既に1920年代半ばで亡命が始まった、というのである。¹⁰⁸このような見方は、共和国時代のトラーの社会の問題性に対する認識とそれに対する姿勢から彼の亡命を理解しようという立場には共通の見方である。W. フリュエヴァルトも、ユダヤ人という限界を負わされた幼年時代から、革命の見掛け上の解放を経て、ヒトラーの収容所国家を先取りする共和国の保守主義へと続く道の延長線上に、トラーの亡命を見ている。¹⁰⁹この道の問題性を、トラーは1933年の事件と亡命体験から、新たな視点の下により先鋭的にとらえ直した。そして、自伝的著作を通して、社会主義的殉教者の伝統に繋がる戦闘的な像を、苦悩し沈黙するドイツの真の存在として、「もうひとつのドイツ」として提示した。W. フリュエヴァルトによれば、それ故トラーの亡命は精神的な意味での牢獄からの脱出の試み、それもヨーロッパの詩人の亡命伝統にねざす、「明日のドイツ」に向けての積極的、戦闘的試みであった。W. フリュエヴァルトは>ドイツの青春<と>獄中からの手

紙くの成立と構想の検討からこのように考察している。

亡命後トラーが特に意識した活動の手段は第一に言葉であった。彼は作家の使命と関係づけて、言葉のもつ政治的力を評価しているが、それには2つの側面があった。1つは物質力としての言葉の力である。⁽²⁰⁾彼は経験的に、時宜を得た言辞が予測し難いほどに物質的力を獲得するのを見てきた。革命時代でもそうだったが、国民的スローガンの大衆の情緒に働きかける力もそのことを示していた。他方、知的力として、言葉は真実を解明し、伝える力をもっている。作品の迫害そのものがそのことの逆証明であり、権力者達も共通の認識をもっていたことを示している。それ故、言葉は反ナチス闘争の有力な手段であった。この言葉の力によって、世論を形成すること、「精神的流行病に対する血清」を作ることが、言葉に従事する作家の使命と意識された。要求する世論なしに、無数の人間の同情なしに、重要な新聞の闘争なしに、無実の人間の救済はあり得ないし、また、ファシズムが全体主義国家の教義を法制化した時代に、だれひとり現代の闘争から免れ得ないからである。⁽²¹⁾実際、ライプチヒの帝国裁判所が国会議事堂放火犯とされたG. デイミトロフを無罪とした例は彼を力づけた。「独裁者も世論に従うのだ。」⁽²²⁾しかし、ドイツでの基盤が失われ、ドイツの真実の情報も入手し難くなり、大衆の意志へ直接働きかけることが不可能になってからは、外国の世論に頼るしかなかった。そして、外国から世論の力によって現実に大きな影響を与えるのは、結局政府を動かしてということになる。その点ではトラーは民主ラシー政府に信頼を寄せ、スペイン人民戦線支援の場合は、新聞社、教会などの団体の他に、各国政府に救済を要請した。ドイツの問題の場合は？この場合は具体的な援助要請となっていない。確かに、例えばニューヨークのドイツデー（1936.12.14）で、ヒトラーに対する闘いは、自由、ヒューマニズム、民主ラシー、要するに人間のための闘いであること、そして、「遅過ぎた」ということにならないよう訴えた。ヒトラーが共産主義に対する防波堤であるかのような幻想が容認されていたとき、その本質を明確にし、ヒトラーに平和を強いることができなければ、ヨーロッパとその文明は破壊されるだろうと警告した。⁽²³⁾しかし、ナチスに屈するよりは敢然と死に赴いたエーリヒ・ミューザームのような人々、ドイツの強制収容所で捕らわれの身になっている2万人の人々、不自由よりも亡命を選んだ数万人の人々の存在を「もうひとつのドイツ」として主張する以外、ドイツ国内で苦しんでいる人々の具体的な救済計画は持ち得なかった。いずれにしても、スペインの場合も、ドイツの場合も実際の成果ははかばかしくなかった。言葉の力はいかに豊かなものであるにしても、それが現実の政治的次元で有効に発揮されるためには一定の条件が必要である。情報収集やメディアの問題もさることながら、何よりも受手を必要としている。しかし、反ナチス闘争のドイツ内外の条件は決して有利なものではなかった。例えばアメリカにおいても、ナチスに対する同情論や反ユダヤ主義（亡命者にはユダヤ人が多かった）、上述の共産主義に対する防波堤論（ナチスが積極的に宣伝）などが根強く存在していた。

（内面の問題）

トラーの働きかける場は公共的な場と、内面の場があった。それらは相互に関係しあうものであり、トラーの政治的働きかけに文化的な色彩を添えた。大衆の意志の実現は、実現の過程で、闘いを通して大衆が成熟することによって可能になるとすれば、その実現に向けて闘うもうひとつの意志が、はじめの意志を支える内面的な何かが必要である。従って、現実の反ナチ

ス闘争の組織化ばかりでなく、闘争の精神的根底への働きかけが重要な意味をもった。亡命生活ひとつをとってみても、実際、それは悲惨なものであった。経済的な面でも心配はつきなかつたし、ヒトラー政府の圧力により、活動、居住の面でも自由ではなかつた。パスポートを持たない亡命者には世界は狭く、絶えず、収容所生活が待っている本国送還や国外退去の不安に怯えなければならなかつた。トラーはそのような亡命者の状況の下で、様々な「恐怖の克服」を抵抗の不可欠の内的条件と考えた。ドイツ国内においてもそれは同様である。彼の最後のドラマ〈ハル神父〉はそのようなことの現れである。このことから、逆に、社会の在り方と同様に闘争もなによりもまず個人が担う、という考え方が明らかになる。トラーにとって、恐怖を克服した者こそが「明日のドイツ」であつた。

このような人々に支えられた闘争の具体例はスペインの闘争であつた。トラーの反ナチス闘争はファシズム一般に対する国際的闘争であつたので、トラーは1938年に戦火のバルセロナを訪問した。そこでトラーは自らの戦争体験を思い出すとともに、闘う人民戦線の人々に強い印象を抱いた。彼はそこで、市民生活は最低の窮乏状態であつたが、カトリック教徒とプロテスタント、民主主義者と社会主義者、自由労働組合のメンバーと革命的サンディカリスト、共産主義者と自由主義者が、それぞれの対立を超えて、自己だけの特別な目的を追求するのではなく、自らを制限しつつ、一つの目標——スペインの自由と独立、人間らしい生活を可能にする基礎の救済——に向かって仕事をしているのを目の当たりにしたのである。要するにそこではトラーが理想としたデモクラシーが創造的に生き生きと活動していた。トラーの目には1933年にドイツになかつたものが現実に見えたのである。

しかし、個人に依拠することは同時にその弱点をも抱え込むことである。トラーの自殺がそのことを語っている。ユーゴのペン会議で、ドイツ代表団の反対を押し切って講演したことに始まったトラーの亡命後の反ナチス闘争において、最初の舞台での成功は彼に国際的連帯に対する希望をあたえ、彼の闘争に対する姿勢をより強固なものにした。従つて、1933年から34年にかけてはトラーの言動は積極的であつた。精神の自由に対する要求や人権闘争への呼び掛けなど、以前と変わるものではなかつたが、そこには以前よりも強い決意が現れた。しかし、C. t. ハールによると、ナチスの成功、勢力拡大や、逆に抵抗グループの分裂、人民戦線計画の失敗等により、トラーにとって新たな開始も次第に幻想であることが認識されたという。彼は1934年の終わりから1935年にかけてをトラーの転機としている。そして、トラーの発言に無力感が現れ、個人の問題や自分に対する要求、被害者の具体的苦悩が前面に出て来たこと、獄中からの手紙〈では「克服されない疲れ」が窮われるようになったことを指摘している。この疲れは確かにトラーの自殺につながるものだった。1936年に平和主義のドイツの問題からの回避を批判した時、運動が殉教的に解消してしまうのを否定し、精神を未来の価値の創造に向けてるように力強く主張した。しかし、その背後で、彼は確実に疲労していたのだ。K. マンは当時のトラーの精神状態について次のように観察していた。

神経組織は5年間の獄中生活から回復しなかつた…トラーの性格には素朴な確信と憂鬱への傾向が混ざりあつていた。彼はメランコリーと闘つた…彼の名誉心のすべては兵士のように自分を保持することであつた。しかし、根本において勝利を信じているものの繰り返し暗い気分の時間、週間がやってきた。

K. マンはその外トラーの不眠症についても何度か言及している。また、自殺の動機について

も、それを詮索しても結局解き難い謎が残るとしながらも、自殺直後の時点では、G. ランダウアーに宛て、妻との離婚、スペインでの敗北、ドラマの上演の困難、不眠と金の心配、生活の下らない事柄全体を挙げ、要するにトラーはもうやっていけなかったと書き送っている。「年をとりつつある自由の戦士は、夜がこの世で与えてくれなかった眠りに憧れたのだ。」⁽²⁸⁾そして、抵抗行動の行き詰まりのもとで、トラーの自殺が決して例外ではないとも伝えている。自殺の動機あるいは自殺を例外ではなくする状況についても少し言及すると、W. フリュウヴァルトは亡命文学全体の流れの中での共通性を考察し、次のように指摘している。多くの亡命作家達は「昨日の世界」を自伝的に回顧しているが、「彼等は、個人の自由の印の下で、自由主義、文化、ヒューマニズムの印の下で現われた市民時代のラディカルな終わりがやってきたのを見た。亡命の中で成立した、あるいは構想された自伝の、大きな共通のテーマは、力づくの集合化の中で体験されたヒューマニスティックな個人主義の孤立であり、個々の人間の実体的孤独の体験、恐怖を呼び起こす体験を通しての、個人の自立に関するリベラルなイデーの終わりであった。」⁽²⁹⁾トラーにとっても「自由の最後のデモンストレーションとしての自殺」が残ったにすぎない、と。

しかし、W. フリュウヴァルトの美しい見解は、トラーの場合ひょっとしたら余りにも教養主義的なものかもしれない。トラーはもともと個人の自立を、あるいは個人主義を「社会から力を得、社会に力を与える」という、社会と個人の、相互に存立を補完し合う民主主義的關係の下に構想していた。トラーの構想の根底に想定される「人間」とは、第一次世界大戦以来、戦争や産業化の過程で、そしてナチス支配の下で生きる権利を脅かされていた人々、具体的には労働者を中心とした層であったし、トラーがその悲惨な運命に同情を寄せた作家達は彼等の知的な友であった。それ故、彼等が存在する限り、状況に働きかけ、また状況から力を得る可能性はいつでもトラーの考えに残っていたといえるだろう。それが亡命生活の中で、極めて危険な緊張感に曝されていたとしても。

ニューヨークの《New Masses》誌に英文で掲載された『エルンスト・トラーの最後の遺言』は、短い文章の中でトラーの抵抗行動が余りにも見事に総括されているので、不吉なほどに遺言を予感させるのだが、その中で彼の社会的文化観が簡潔に表現されている。「文化 (culture) は芸術、文学、科学の創造的生産にとどまらず、それは日常生活の顔、コミュニティや国家内の諸関係、およびそれらを規定する道徳的な理想を意味する」と。ここでは文化概念は非政治的教養的なものから、社会のあり様の問題にまで広げられている。それは人間の尊厳に対する敬意と歴史的洞察から発している。トラーにとって人間の尊厳は、個人の自由、正義、正当な発達に対する要求、生きているものへの同情などを意味した。それに対し、ファシズムは人間の利用価値を戦争への適性で評価した。近代の産業社会もこの意味では根底においてファシズムと変わらなかった。それ故、人間の尊厳に関心を抱く文化は社会のあり様、さらには社会の経済的構造にも関心を持つものでなければならなかった。従ってまた、このような文化にとって、反人間的反動との闘いは避けられない使命であった。トラーはこの闘いを、しかし、決して暴力的なものには考えていない。人々が闘いの過程で成熟するとすれば、人々がその過程で墮落することもある。それが混乱に終わったかつての革命時代の経験であった。ファシズムによる危機に際しては、彼は恐怖を克服した知性、ヒューマンな連帯、それに支えられた行動を提唱した。行動は本質的なものであった。そのための恐怖の克服であった。—「亡命者達は脅

迫された文化を防衛するために、どのように自分達の分担を担うことができるのか。」——トラーの苦難に満ちたすべての経験に基づく認識によれば、脅迫された文化は、自由、正義、そして人間の尊厳に対する「願望が意志に、意志が行動に変わる」時にのみ擁護されるのだという⁸⁴。これはまさに個人の内面の変革に対する要求である。トラーは人間の尊厳を守る闘いがまさに個人の存立のためのものであるが故に、彼の生涯最後の1行で、個人の変革を、それがもっとも必要とされた時に求めたのであった。

註

- (1) Ernst Toller : Gesammelte Werke 1. (以下GW1とする) 268ページ。
- (2) トラーの非暴力闘争については、拙稿「エルンスト・トラー『人間——大衆』の解釈を巡って」(佐藤自郎教授還暦記念独逸文学論集 1987) 参照。
- (3) Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. 419-420ページ参照。
- (4) M. Wegner : Exil und Literatur. 49ページ参照。
- (5) K. Mann : Wendepunkt. 450ページ, K. Mann : Prüfungen. 318ページ参照。
- (6) 年譜は主にW. Frühwald/J. M. Spalek : Der Fall Toller. Kommentar und Materialien. およびW. Rothe : Ernst Toller を参考にした。
- (7) K. Mann : Prüfungen. 319ページ。
- (8) Th. Mann : Von Deutscher Republik 序文。
- (9) S. Lamb : Ernst Toller. Vom Aktivismus zum humanistischen Materialismus. 165ページ参照。
- (10) 同上書 170ページ以下参照。
- (11) GW 1 168ページ。
- (12) GW 1 71-72ページ参照。
- (13) 拙稿「エルンスト・トラーとバイエルン革命」(北陸大学紀要第7号 1983) 参照。
- (14) GW 1 75ページ参照。
- (15) GW 1 72ページ。
- (16) GW 1 182ページ以下参照。
- (17) E. H. カー「危機の二十年」(172-173ページ参照)。
- (18) U. K. Ketelsen : Literaturkonzeption und Exilerfahrung bei Ernst Toller. 148ページ参照。
- (19) W. Frühwald : Exil als Ausbruchversuch. Ernst Tollers Autobiographie. 493ページ参照。
- (20) GW 1 195ページ参照。
- (21) GW 1 196ページ参照。
- (22) W. Rothe 同上書 112ページ参照。
- (23) GW 1 207ページ参照。
- (24) W. Frühwald 同上書 491ページ参照。
- (25) GW 1 211ページ参照。
- (26) C. t. Haar : Ernst Toller. Appell oder Resignation. 188ページ参照。
- (27) GW 1 188ページ参照。
- (28) K. Mann : Prüfungen. 321ページ参照。
- (29) K. Mann : Briefe. 69ページ。なお、「Der Fall Toller」(227ページの解説では自殺の動機は不明のままだろう、とされている)。
- (30) K. Mann : Der Wendepunkt. 450ページ。

- (31) W. Frühwald 同上書 496ページ。
- (32) GW 1 197ページ。
- (33) GW 1 268ページ。
- (34) GW 1 270ページ。

参 考 文 献

- Toller, Ernst : Gesammelte Werke in 5 Bänden. Herausgegeben von John M. Spalek und Wolfgang Frühwald. Carl Hanser Verlag 1978
- Frühwald, Wolfgang und Spalek, John M. (Hrsg.) : Der Fall Toller. Kommentar und Materialien. Carl Hanser Verlag 1979
- Büttow, Thomas : Der Konflikt zwischen Revolution und Pazifismus im Werk Ernst Tollers. Hamburg 1975
- Frühwald, Wolfgang : Exil als Ausbruchversuch. Ernst Tollers Autobiographie. In : Die Deutsche Exilliteratur. 1933-1945. Hrsg. von Manfred Durzak. Stuttgart 1973
- Haar, C ter : Ernst Toller. Appell oder Resignation? München 1977
- Ketelsen, Uwe-K. : Literaturkonzeption und Exilerfahrung bei Ernst Toller. In : Schreiben im Exil. Zur Ästhetik der deutschen Exilliteratur 1933-1945. Hrsg. von Alexander Stephan und Hans Wagener. Bonn 1985
- Lamb, Stephen : Ernst Toller. Vom Aktivismus zum humanistischen Materialismus. In : Das literarische Leben in der Weimarer Republik. Hrsg. Keith Bullivant. Scriptor-Verlag 1978
- Rothe, Wolfgang : Ernst Toller. Reinbek bei Hamburg 1983
- Mann, Klaus : Prüfungen. München 1968
- Mann, Klaus : Der Wendepunkt. München 1976
- Mann, Klaus : Briefe. München 1975
- Berg, J./Böhme, H./Fähnders, W./Hans, J./Heller, H-B./Hintze, J./Karrenbrock, H./Schütze, P./Thöming, J./Zimmermann, P. : Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. Frankfurt am Main 1981
- Wegner, Matthias : Exil und Literatur. Deutsche Schriftsteller im Ausland 1933-1945. Frankfurt am Main 1968
- E. H. カー (井上茂訳) 危機の二十年 東京1964